



| | |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title | ヨーロッパの生活から |
| Author(s) | 高井, 一郎 |
| Citation | デザイン理論. 2000, 39, p. 118-119 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/52817 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヨーロッパの生活から 高井一郎

私は1999年6月から2000年4月まで国外におり、このほど帰国しました。

最初はイギリス・ロンドンの南方にあるロチェスターと言うところでした。学校の名前はKENT INSTITUTE of ART & 'DESIGNと言います。次はドイツ・ケルンでライン河のほとりにある FACHHOCHSCHULEKÖLN と言うところでした。その次はフィンランド・ヘルシンキの UNIVERSITY of ART AND DESIGN HELSINKI で、そしてその次はトルコ・イスタンブルの ISTANBUL TEKNIK UNIVERSITESI でしたが、それぞれの学校からしかるべき役割を与えられ席を持つことができました。

イギリスでは国外滞在にまだなれていませんでしたので学校内外で戸惑うことばかりでしたが、そのうちの2つを紹介しようと思います。

その1つは道具の発達の歴史に関することです。これは私の専門のことになるのですが、日本は明治時代にイギリスから種々の道具や機械などを輸入していたのですが1930年代以降色々な事情のためそれが途絶え、同時に道具発達の歴史もそのあたりで切れているので産業革命の本場であるイギリスではどうであったかと言う思いがあったのです。

結論から言いますとイギリスでも日本と同じで1930年の後半から道具の歴史は突如として戦争の歴史に変わるので。

私の思っている本は KITCHEN という項目にあることが数回目でわかりました。また、おなじ図書館でジョニー・カルダーの The Victorian Home という本を見つけました。

—このことに関しては次回研究発表の時報告します—第2は“必習”についての考え方の違いです。それは図面に関するこでしたが私が“そんなことは必習でやったはずだ”と言ったので問題になりました。ある先生はこういいました。必要なことは図書館に行けばわかる。そして“必習”というのは論理学以外にはない。と言いましたので、これには全く驚きました。しかし、こういう考え方にはヨーロッパ全体のものであることがだんだんと分ってきました。

話はかわりますが、ケルンのエリホフ教授は国際的にも有名な方ですが、私とはそりがあわず、そのせいもあってドイツ国内のあちこちに行きました。そのひとつのエッセン大學はなかなかしっかりしており ID 担当のシュテファン教授も丁寧に説明してくれ好感がもてました。ドイツではその他にもハノーヴァ・ブレーメン・ブッパタール・ポツダム等の学校を訪問することができましたし、学校以外では芸術家村としてアールヌーボー建築が多く残されているダルムシュタットや宗教改革に縁の深いウォルムス等にも行きました。

ドイツからフィンランドには8月の後半に行きました。なぜならフィンランドの大學生は9月1日から始まるからです。

ヘルシンキはフィンランドの最南端にあるのですが、日本の稚内よりもっと北にあり寒さも半端ではありません。なにより戸惑うのは日の長さで、冬は2時頃日が沈みますし夏は夜の11時頃夕焼けです。

学校を推めてくれたのは現在山口大学に勤務する井生君であり、大學の主任教授はライ

モ・ニッカネン、同室の教授はピーター・マクグロイです。

私はピーターと、よく議論をしましたが、私はその議論の中から新しい研究テーマを見つけることが出来ました。

それは鋸に関することです。

ご存知のようにヨーロッパでは全て押す式で日本では引きます。ピーターは押す方が体重がかけられるし合理的だと言うのです。ところが日本に帰ってそのことを専門家に言うと全く反対の言葉が返ってきます。

それではその境界線はどこか、中国か印度か、それとも――？

フィンランドは木の国です。木材に関する研究をしなければと思い、学校にそのことを頼んだところ、ヴァーサ地方のデザインセンターのようなところに紹介してもらいました。ヴァーサ地方は木材工業の盛んなところで多くの工場があり、また木工の学校もありました。驚いたことにある人の道具箱の中には日本の胴付鋸があるではありませんか。モノを作る人間はやはり知っているのだと思い、うれしくなりました。

ヘルシンキは良いところでした。物価はイギリス・ドイツに比べると少し高めでしたがそれでも日本の半値くらいのようと思われましたし、人も穏やかのように感じられました。フィンランド語を習うべく学校に通ったのですが、これはモノになりませんでした。1999年10月1日から次の任地に行かなければならぬのですが、私はICSID世界大会に出席するためオーストラリアのシドニーにおりましたので実際にイスタンブルに行ったのは10月8日でした。

デザインのヘッドはNigan Bayazitと言う女性です。ちなみにここ建築学部の学部長のMine Inciogluも女性です。

イスタンブル工科大学には2000年の3月ま

でお世話になりましたが、その間は大学の官舎にいることになりました。

学校は結構忙しく、月曜から金曜までなんらかの授業が入っていました。

学校と家とは10kmほど離れていましたので私はいつもミニバスを利用していましたが、その運転は大変乱暴なものでした。

最初イスタンブルにきた頃は変なところにきてしまったと言う感じでしたが、しばらく住むと物価は安いし自由はあるし、こんな良いところはないと思うようになるから不思議です。

例の鋸についてですが、驚いたことにトルコでは引く式で日本と同じです。

中国の北京に友人がいるので聞いてみるとその人は引く式であると断言するのですが、文献では押す式であると言っています。

カンボジアに駐在している国連職員の息子に頼んで現在市販されている現物を買ってきてもらいましたが全て押す式でした。

しかし、道具と言うものは何百年か経つと、元々のものか輸入されたものか分らなくなるのが常ですから全部は信じることが出来ません。

現在の私の疑問はあの出雲大社や伊勢神宮の棟木はどのような道具で作られたかと言うことです。

私のささやかな鋸の研究がヨーロッパとアジアのおぼろげながらの分岐点を探し出し、加えて日本民族のルーツを探るよですがとなればと思っています。